

薮原宿の空にはツバメが飛び回り、夜になれば白く小さな姿が電線上に音符が連なるように浮かぶ。

ツバメは人が棲んでいる家を選び巣をつくる。

外敵から子どもを守るために人の温度を感じとっているようだ。

ツバメが人の温度のある家に自らの力で巣を作り新しい命を育てるのならば、私たちは空家と呼ばれる家で、どんな方法で新たな命を吹き込めばよいのだろうか。

空いている家だと聞き開いた扉から入った家の中は、人は居なくとも、人の温度があった。

無機質な箱のような響きの「空家」ではなく、薮原を生きた温度がそこにあった。

薮原宿を生きた歴史とその熱のある温度は扉が閉まっていたことで保たれ続け守られていたようにも感じる。

薮原に生まれ育った85歳の方の子ども時代の楽しみは、勉強よりも各家の開いた扉から見える職人の手仕事だった。

その光景は、空家となった家の中で見つけることができた。

空家と呼ばれ静かに佇む建物こそ、薮原の歴史を辿れる種が散らばり、未だに芽が生えているのかもしれない。

好奇心を胸に秘め、そんな声を私たちが拾えるのならば、種を辿るようにその建物の物語を追うことは出来ないだろうか。

江戸時代、明治、大正と薮原宿の6~7割はお六櫛を主産業に栄え、終戦の昭和20年から数年間お六櫛ブームが到来した。

しかしいつの日か、お六櫛では生活が困難だと次々に職人たちが転業した。

お六櫛よりも収入が増えたことで、今の家は不便だと次々家を建て替えた。

建物と一緒に失われたものは何だったのだろう。

一緒の方向へと走っていた人々の魂が見えなくなってしまったのではないか。

人の思いが宿り、建物が発していた声。

その集合体が宿場町をつくっていたのではないのか。

いつのまにか遠くへといった声。

あるものを壊し、新しく作り変え、使い捨ての精神で忘れてゆく大切なこと。

何がよくて、何が悪くて、何が正しいのか目を凝らさなければ分からなくなる。

ツバメが自分の子どもの命を守るために、人の温度のある家をじっくり見つめているのならば、私たちは、人は棲んでいなくとも、藪原の温度のあふれた家をじっくり見つめたい。

巣立っていき、ツバメが居なくなった空いた巣にいつの日か別のツバメが新たな命を育むように、私たちもこの建物を次へと渡すための紡ぐ作業をしなければならない。

「紡ぐ」という優しく繊細な作業。

紡いだ思いがまた種となり生きてゆく。

私たちにとって、その建物があらゆるものと紡ぐように繋ぐことができる行為が、絵を描いたり、創ったりすることだろう。

ただの箱を次の希望者に地域に返すような「空家対策」になってはいけない。

創る心を通し、建物の声を聞きたい。

建物の声からあらゆるものを感じ、作品が生まれるのならば、こんなに楽しい紡ぎ方は無いと思う。

きっと藪原に棲む人も楽しいだろう。

次の希望者に、そして地域に、お返しする前に、私たちの作品が語りだしてほしい。建物と一緒に。

地道ながらに種を拾い、また蒔いてゆくのだ。

大沢理沙